

学究、求道の士として

本田 弘 敏

大平さんとの出会いは、私が親炙していた池田勇人首相が蔵相時代の秘書官としてお目にかかったのがはじまりであるので、昭和二十六年頃であろうか、もつ随分と前のことである。その初対面のときの大平さんについて受けた率直な印象は、決して好感の持てるという感じのものではなかった。フッキラ棒で、どちらかといえは、とっつきにくかった想い出が残っている。

その後、池田さん中心の月一回の集まりの「一水会」や、時たまのゴルフ会等で会う機会が重なることに、私は次第に大平さんに親しみを感じ、愛着を深め尊敬の念を抱くようになって行った。このように池田さんにより識った大平さんであったが、池田さんより永い間のお付き合いをさせていたただくことになった。

私にとり、また私の三女幸子夫妻にとつて、忘れられない記念となっているのは、大平さんに月下氷人となつていただいたことである。池田さん、そして大平さんの憩いの場所の一つであった築地の旅館栄家の、今は亡き女将和田栄子さんは男勝りの仁侠の気風で知られていたが、この女将が、私の末娘の幸子の結婚について親身になつて気を遣い、当時外相であつた大平さんの媒酌による、外務官僚の渋谷君との結婚の段どりを、私を急かすようにして決めてしまった。そして昭和四十七年十月二十五日、この新しいカップルが誕生したのであるが、この日は同時に大平さんが外相としての任を終え、モスクワよりの帰国の日でもあつたのである。会場のホテルオークラへ駆けつけられ、ほんのひとときの休息をされて直ちに式場へという慌しさであつたので、私どもは多忙

な日程のなかでの貴重な時間を割いていただいたことに一人感謝の念で一杯であった。

この新夫婦はほどなく西独へ、そしてユーゴと海外勤務が続いたので、大平さんが西独訪問の際のご案内役として接したほかは、お目にかかる機会もなかったようだが、亡くなられる三カ月ほどまえに外務省の二組の夫妻とともに私邸に招かれ、親しくお話を聴きする幸いに恵まれた由である。

このときの大平さんは、非常に寛がれて大変楽しいお話が数多出たそうで、あらためて大平さんの博学さに驚かされ、温かい人柄に強く魅かれたと感銘深げに述懐していたが、娘夫婦のこの話を聞いて、私は亡くなられるちょうど十一カ月前、女優の檀ふみさんとの対談で、「夫婦を軸にして作る家庭という世界は別世界です。外の世界はかわいい世界、油断のならない世界です。家庭に帰ると非常に落ち着きと安心を取り戻すことができる。そこにはかわいいものがない。それを守っていくことが大事なことでしょいか」といわれたこと、そしてまたその半年ほどまえの参議院本会議での家庭の問題についての応答のなかにも「家庭がわれわれにとって最大のオアシスであって、これが充実したものであることは、社会の基礎であると考えております」と述べられたことに想いをいたし、大平さんはこの将来のある三組の夫妻に対し、家庭における自分の本当の姿で接することによって最高の最後の贈物をされた思いを強くしたものである。

大平さんは、その生涯を通して努力研鑽され蓄積された識見は、事に当って光輝しても、いわゆる大衆にアピールするというものではなく、秘められ理解されずに隠された部分の大きかった方ではなかったかと思う。そのような大平さんに、私は、つねづね学究、求道の土に近い肌合いを感じる思いがしていたが、センセーショナルな死によって、人間大平像が広く世に顕示され、その政治家としての業績の歴史的評価が早まり、クローズアップされたことを、天国の大平さんはどう受けとめておられることであろうか。

(東京ガス相談役)